

ぼくは、なんて幸せなんだろう。二十一世紀のニュージールランドに住み、戦争もなく、両親も健康で、パンをぬすむ必要もない。平和で安定した暮らし。今まで、当たり前前で感謝したことがなかったけれど、この本を読んで、もしぼくがジャン・バルジャンの立場なら、一体僕に何ができるのだろうか。あの時代は、全てが決められている。一人の無力な人間が、何か変えることができるのか。

今、僕はニュージールランドという民主主義の国にいますので、自分の力で努力すれば、いろいろ変えていくことができる。でも、あの時代のジャン・バルジャンは、もしかしたら、今のシリアやアフリカにいるのと同じかもしれないと僕は思った。

いくら努力して仕事につこうとしても、家族の地位が低かったり、貧しすぎて、スタート地点にさえ立てないのだ。

ぼくは「ああ無情」を読みながら、シリアやアフリカの貧しい子供たちを思い浮かべた。いくらがんばろうとしても、まず最初に食べ物が無いのだ。でも他の人が持っているわけでもない。とにかく周りに食べ物が無いのだ。

兄弟がたくさんいる。全員がおなかを空かせている。仕事をしたい。でも仕事がない。だから、お金をもうけること自体ができないのだ。がんばろうとしても、仕事がないのだ。なまけているわけではないのだ。学校に行くことさえできない。その学校でさえもないところもあるかもしれない。だから、いつまでもスタート地点にたどりつけない。

コゼットの母は、ジャン・バルジャンと同じだった。しかも、女一人で、子供までいて、一体何ができるのだろう。コゼットの母を責めるのは簡単だ。今のぼくたちの立場から見ると、コゼットの母がしたことはいいことではないと判断できる。だからといって、彼女は何をできたのだろう。

コゼットを救ったジャン・バルジャンは、かつて若いときにパンをぬすみ、十九年間もろややにいられていた。その後ジャン・バルジャンはろややから脱獄したのだ。そして、名前を変えて、新しい人間として成功し、市長となった。そこに、ジャベール警部が現れた。ジャベール警部はジャン・バルジャンが脱獄して以来、ずっとジャン・バルジャンを追っていた。

脱獄はいいことではない。しかし、たった一つのパンをぬすんだだけで、十九年間もろややに入れられていたジャン・バルジャンには、他に選たくしがあつたのだろうか。もし、ジャン・バルジャンが法律を守つてろややにずっといたら、もしかしたら死んでいたかもしれない。現在、シリアやアフリカの刑務所では、ひどいことが行われていると、ぼくはニュースで聞いた。

ジャベール警部は、すぐれた警察官だ。警察官の仕事を一生けん命し、いつまでもあきらめないうでジャン・バルジャンを追いつけた。

ぼくは、何年か前まで、大人になったら警察官になりたかつた。今でも少しなりたいたいと思う時がある。なぜなら、警察官は法律を守り、正しいことをする正義の仕事だからだ。

しかし、それは法律が誰にも平等で、正しい時に、正義の仕事となる。あの時代の法律は、平等だつたと言えるのか。

ジャベール警部は、ジャン・バルジャンに命を救われて、その後セーヌ川に身を投げて自殺した。せつかく命を救われたのに、なぜだろうか。ジャベール警部は、これまでずっと、悪人と思っていた

ジャン・バルジャンをつかまえるためだけに生きてきた。正しいことをしていると信じていたが、悪人のはずのジャン・バルジャンが、実はいい人だったのだ。

ジャン・バルジャンは、なぜジャベール警部を助けたのだろうか。ジャン・バルジャンにとっては、ジャベール警部が死んでしまったほうが都合がいいにちがいない。けれど、ジャン・バルジャンがジャベール警部を助けたのは、ジャン・バルジャンがいい人だからだ。

ぼくたちは、今とても幸せだ。食べ物も十分あり、誰でも教育を受けることができ、努力すれば好きな仕事につくことができる。それなのに、よくばりで、自分勝手な人間がたくさんいる。

ぼくはこの本を読んで、今の幸せを当たり前のことと思わないで、感謝の気持ちを忘れずに、努力していい人になりたい。